

PEN-Internationalの日本代表として

電子情報学科情報工学専攻 2年
長谷川 晃子

私がこのPENに応募した理由は二つある。一つは、他の国での聴覚障害者保障制度を知りたかったこと。特に中国へ行くのはめったにないチャンスだと思った。もう一つは、三国の学生代表が集い、お互いにディスカッションをしてみたかったことである。そして、私はPEN-Internationalの親善大使として初めて中国へ渡った。

私がこのプログラムで一番期待していた事は、三国のろう学生と様々なテーマについて話し合うことだった。例えば、中国では障害者保障制度はどのような仕組みなのか、ろう学生の日常生活、今問題になっていることなど、私の心は好奇心で溢れていた。

実際に天津理工大学で、5日間交流してみて私は沢山の「文化的な違い」についてこの目ではっきりと見ることが出来た。

まず、一番感じたことは、中国では教師と生徒のコミュニケーションがきちんと取れ正在のことだった。中国のろう学校での教師達は皆、口話、読話、手話を用い、どれもはつきりした表現で生徒にきちんと伝えていた。また、ろう学校のほとんどの生徒は聴力が軽く、補聴器を装着していなかった。コミュニケーションがきちんと取れているのは教師達が手話を身に付け、そして生徒達もほとんどがある程度は聞こえているからなのだろうと私は思った。中国での障害に対する保障はどうなっているのか中国の学生に聞くと、日本と同じように障害者手当金があり、それを受け生活している人もいると答えが返ってきた。アメリカではそのような制度はなく、逆に、障害者が自立できるような環境が整っているとのことだった。このように三国での保障制度が違う事に気づいた。

またろう学校では一体感があった。クラスに個人の成績表が書かれており、さらに学校の廊下にクラスごとの成績表も書かれていた。皆がいい成績を取る為に必死になっていることが強く感じられた。

日常生活の中では、宿舍のお湯の出る時間が限られていたり、大学のトイレは水を流さない形式だったりした。古くなった本はまとめて別の所で売られていた。便箋と封筒もかなり古く、大事に保管されていたようであった。そこで私は中国人には物を無駄にしない生活が身についていると思った。

天津での学生同士での交流では、最初に期待していたようにディスカッションはできなかったが、中国語、英語、日本語が混ざった会話は非常に新鮮だった。お互いに相手になんとか伝えようと必死になる。そして伝わったときは本当に嬉しくなる。

アメリカで聞いた自動車免許について中国の学生に聞いてみると、中国では聴覚障害者は運転免許を持つことは禁止されると教えてくれた。その事には驚いた。アメリカでは聴力が重くても、目でしっかりと見れば問題ないという考え方、中国では"音"が耳に入らないから禁止するという考え方であることが分かった。

このように三国の「文化的な違い」について知ることができ、とても貴重な経験となった。また、今回の派遣で友達となった中国、アメリカの学生との友情は、これからも大事にしていきたい。また機会があればその時は真剣に、障害に対する考え方についてディスカッションをしてみたいと思う。